

■ 世界的なコロナ感染再拡大への警戒がジワリ強まる

前回更新分の本欄で述べた通り、ドル/円は105円台半ばあたりに集中していた複数の節目に上値を押さえられ、再び下げ基調を強めている。「複数の節目近辺では一旦ショートを振るスタンスで臨みたい」とも述べたが、やはりそれは正解であった。

今月9日に噴出したファイザーのワクチンに関わる話題に加えて、今週はモデルナのワクチンの話題も大いに取り沙汰されている。ただし、市場のなかには慎重かつ冷静に見守りたいとする向きも増えている模様で、徐々に“ワクチン騒動”に対する過剰反応も沈静化しつつある。

なにしろ、当のファイザーの株価はワクチンの話題で一時急騰したものの、ほどなくワクチンの話題が出る前の水準まで急落したのである。もちろん、長い目で朗報であることは間違いないのだが、この冬の時期の感染拡大に対する効果は残念ながら期待薄と言える。

結果、いわゆるリスク選好の円売りの動きはすっかり鳴りを潜めてしまい、目下のところは一時期0.97%まで上昇した米10年債利回りが低下してきていることに伴うドル売りの流れの方が強くなっている。この米金利低下の背景には、17日に発表された10月の米小売上高のように、新柄コロナウイルス感染拡大の余波が实体经济に再び悪影響を及ぼし始めていることを示すデータが散見されていることも大きく関わっていると見ていいだろう。

17日に発表された米小売最大手ウォルマートの8-10月期決算の内容は好評価に十分値するものであったが、11月~21年1月期の業績予想の開示を見送ったことは、市場で弱気材料視されていた。米国内で再び厳しい都市封鎖（ロックダウン）に踏み切る地域が増える可能性も否定しきれないなか、さしものウォルマートでさえ、やはり当面の見通しは立てづらいということなのであろう。

そんななか、再びドル/円は104円処を下抜けてきた。目先は、今月6日安値から11日高値までの上げに対する76.4%押しの水準=103.77円が意識されやすく、仮に下抜けると6日安値=103.18円を試しに行く可能性が高いと見られる。

そんなドル安の流れは当然、ユーロ/ドルの水準を再び押し上げることに貢献している。同様にポンド/ドルも強い基調にあるが、こうした動きにどこまで付いて行っているのか…大いに迷うところではある。



ユーロ/ドルについては、まず依然として1.1900ドル処が極めて厚い上値の壁として意識されているように思われることが一つ。

また、左図に見るようにパラボリックが9月下旬に基調転換したことを示すシグナルを発したうえ、MACDが9月半ば頃から低下し始め、ほどなくシグナルラインを下抜けて共に下向きで推移している点がどうにも気になる。このパターンが、2018年2月に1.2555ドルの高値をつけて少々もみ合った後に急落したときのケースと似ているように個人的には思えてならない。

なお、ここにきて欧州連合（EU）の首脳が7月に合意した復興基金案の成立が遅れているとのニュースが飛び込んできており、これは軽視できない。やはり、ユーロ/ドルの1.19ドル手前あたりの水準は戻り売りで臨みたいと考える。
(11月19日 08:40)